

# モンゴルにおけるデジタル人文教育について (文学を例として)

P.ヤンディー

(モンゴル国立教育大学社会人文科学部文学科講師・学術博士 (Ph.D))

デジタル人文学〔デジタル・ヒューマニティーズ、Digital Humanities〕はコンピューター科学と人文学の深化したインテグレーション化〔統合化〕から生まれた分野である。言い換えれば、デジタル人文学は文学、歴史学、哲学などの伝統的な人文学の諸分野において計算手段の利用に関連して生まれた新しい分野である。

この分野はデジタルの方法や多様な文化の交差を研究対象とし、計数的手法を人文学と結合させるすべての法令や利用方法を体系的に研究するものである。

現代社会において、情報社会、電子技術の世紀、情報の世界規模通信網〔グローバル・ネットワーク〕であるインターネット、バーチャル現実〔仮想現実〕、計量革命などの語句が普遍的に使用されるようになったことは、この時代の文明文化空間における新たな様相であり、主たる特徴である。このような語句は、私たちの生活様式にどのような変化と刷新が生まれ続けているのかをはっきりと示している。

世界の多くの国の学者や思想家は、二十一世紀のこの時代を「デジタル技術革命と発展の新時代」と名づけている<sup>1</sup>。このように技術が急速に発展している現代において、教育の分野、その中でも文学の分野で、デジタル文学という概念が生まれてから一定期間が経過した。

デジタル文学とは不明確な概念であり、だれに聞くかによって、その概念も変わってくる。これを、デジタル形式で作成されたテキストから構成される、多くの場合コンピューター上で読むための作品と考える人もいれば、その一方で、電子文学の面でデジタル文学とは「独立した、あるいはネットワークに関連づけられたコンピューターの可能性と条件を利用し、文学の重要であると思なす部分上で作業することを言う」と思なす人もいる。作家のサイモン・グロトスは、デジタル文学とは「技術に立脚した現代文学」だと述べている。これらすべてを見ると、デジタル文学という概念の最も主要な構成部分は技術（テクノロジー）の利用であることが見て取れる。その意味において、〔デジタル文学は〕基本的に文学の新しい手段であるばかりでなく、どんな文学がデジタル文学に含まれるのかという疑問も生じてくる。

いくつかの研究書では、電子書籍、電子テキスト、電子コンテンツといったような著作物はデジタル文学には含まれず、デジタルメディアとデジタルテキストの交差であると思なされている。したがって、コンピューター上で長編小説を執筆し出版しても、それはデジタル文学とはなりえない。しかし、ツイッター、ハイパーテキスト、ビデオといったようなプラットフォーム形式で生まれた作品はデジタル文学に含まれるのである。これらすべてについて、私たちはモンゴル文学の事例に基づいて明らかにし、取り上げて見ることにする。

---

<sup>1</sup> B.ムンフバヤル「文学のデジタル思潮 韻律と形式」、1頁。